

●目次

はじめに	3
第1章 ヴィジュアル系の誕生と歴史	
1-1 ヴィジュアル系の誕生	4
1-1-1 海外のロックバンド	4
1-1-2 日本のロックバンドの流行	4
1-1-3 新たなロックバンドの在り方 「お化粧品系」	5
1-2 発展・ブーム	5
1-2-1 ジャンルの広がり	6
1-2-2 ブームの副産物	7
1-3 ブームの終焉・再興	7
1-3-1 次世代のヴィジュアル系	8
1-3-2 活動の場の変化と再興	8
1-4 現在のヴィジュアル系	9
第2章 ヴィジュアル系バンドの世界	
2-1 ヴィジュアル系の定義と現在のシーン	11
2-1-1 現在のヴィジュアル系	11
2-1-2 「世界観」	13
2-1-2-1 歌詞	13
2-1-2-2 楽曲・パフォーマンス	15
2-1-2-3 衣装・メイク	16
2-2 ヴィジュアル系を構成する若者たち	16
2-2-1 黎明期～最盛期のヴィジュアル系	16
2-2-2 停滞期～現在のヴィジュアル系	17
2-2-3 性別からみたヴィジュアル系	18
2-2-4 ヴィジュアル系バンドの生活	18
2-3 まとめ	19
第3章 ヴィジュアル系バンドのファンの世界	
3-1 ヴィジュアル系バンドのファン	20
3-1-1 バンギャルとは	20
3-1-2 バンギャルの行動	20
3-1-2-1 服装	20
3-1-2-2 ライブ中の行動	21
3-1-2-3 バンギャルの購買力	22
3-1-2-4 情報と繋がり	22
3-2 バンギャルを構成する人達	23

3-2-1	バンギャルの世界の構造	23
3-2-2	インターネット上でのバンギャル	24
3-2-3	他のジャンルとの比較	25
3-2-3-1	求める位置づけの違い	25
3-2-3-2	共通するファン心理	26
3-3	海外のバンギャルたち	27
3-4	まとめ	27
第4章 ヴィジュアル系バンドの閉鎖性		
4-1	閉鎖性	28
4-1-1	シーンの内側から見た閉鎖性	28
4-1-2	シーンの外側から見た閉鎖性	29
4-1-3	私たちの勘違い	29
4-2	まとめ	30
第5章 まとめ		
おわりに		33
参考文献・HP		33
調査資料		34

●はじめに

日本には伝統的ではない部分で特異な文化がある。その一例としてこの論文ではヴィジュアル系バンドを取り上げる。ヴィジュアル系は1980年代後半から生まれた比較的新しい文化である。

私自身、ヴィジュアル系の文化にはどっぷりとつかっており、普段聞くためにウォークマンに入れている楽曲の約2500曲のうち2000曲はヴィジュアル系バンドという程度にはハマっているといつて過言ではない。

ここでヴィジュアル系を取り上げることによって一度ジャンル自体を見直す目的も兼ねてこのテーマを選択した。

ヴィジュアル系自体、流行の音楽であった時期からしばらく経ち、表舞台からは一旦消えていた。しかし、完全に消えることはなく続いていた。そしてここ数年また少しずつ表舞台に復帰してきている。しかし、かつての流行の時期とは少し毛色の違う状況になっている。傍から見るととても閉鎖的であったようなオープンな存在ではないようにも映る。それがいったいどのように醸成されていったのか。この疑問をヴィジュアル系バンドの世界、またそれを支持するファンたちの世界を改めて見ていくことで解明していく。

1章では日本の音楽、特にロックの歴史に焦点を当て、ヴィジュアル系の誕生から現在までの歴史をまとめた。メディアで取り上げられていた時代、表舞台から去った時代、そしてまた戻ってきた時代の変遷を見ることで現在のヴィジュアル系の状況を再確認する。

2章ではヴィジュアル系を構成する要素としてのバンドマンに焦点を当てた。ヴィジュアル系と一言に言っても内包しているサブジャンルは多く、また、これまでヴィジュアル系にありがちだと思われていたこと、またその他に現在のヴィジュアル系にある事柄をまとめた。加えて、ヴィジュアル系の中に流れる雰囲気の違いや、インディーズで活動しているヴィジュアル系バンドの生活に関しても取り上げた。

3章ではヴィジュアル系を構成するもう一つの要素であるファンに関してまとめた。バンドの醸し出す雰囲気も異質なものがあつたためにファンもそれに近い雰囲気を持っている。そこに焦点を当て、ヴィジュアル系のファンがどのようにバンドマン達を応援しているのかをまとめた。

4章では2章と3章を踏まえたうえでヴィジュアル系がなぜ閉鎖的なのかをいくつかの視点から考察し、まとめていく。

5章ではこれまでの論を踏まえてここで提示した疑問に対して最終的な総括を行った。閉鎖性はアングラな文化には存在しがちであるがもともと表舞台のきらびやかな世界にいたヴィジュアル系がまた音楽のメインストリームに戻るために閉鎖性を緩和していく方法を提言する。

第1章 ヴィジュアル系の誕生と歴史

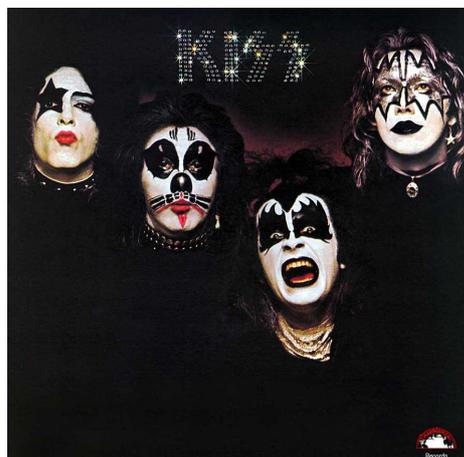
1-1 ヴィジュアル系の誕生

ヴィジュアル系のバンドは突然変異的に日本の音楽シーンに登場したわけではない。その背景にはこれまで興隆してきたロックのジャンルの影響がうかがえる。

1-1-1 海外のロックバンド

ロックというジャンルが確立してから数十年という時間が経っているがイギリス、アメリカを中心に楽曲の雰囲気、演奏技法や音色、果てはファッションに至るまで様々な変化を続けてきた。その中でロックやメタルなどのジャンルでは他のバンドと格差をつけるために **KISS** を初めとする過激なメイクをするバンドが現れてきた。こうしたバンドの登場は同じ時期に活動をしていたバンドのみならず、その後のロックバンドにも多大な影響を与えることになる。このような状況から 1970 年代から 1980 年代にかけてメイクをするバンドが生まれることになった。そしてほどなく日本の音楽シーンにも輸入されメイクをするバンドが増えることとなる。

図 1-1 ロックバンド「KISS」



出所：KISS FaQ

1-1-2 日本のロックバンドの流行

1970 年代、日本では空前のバンドブームが起こっていた。主なジャンルとしてはロックであり、代表的なバンドはサザンオールスターズや、RC サクセッションなどがある。それまでのバンドはグループサウンズとしてフォークソングなどのジャンルを演奏するものが主流であった。また、さらにさかのぼるとロックというジャンル自体不良文化、反社会性を助長するものとして社会自体から忌み嫌われていた。この時期に日本の音楽シーン自体にロックが浸透することになる。

そして 1980 年代にはもう一つのロックバンドブームが起こる。THE BLUE HEARTS などを代表としたパンクバンドブーム、また聖飢魔Ⅱなどでよく知られるジャパメタブームのこの二つを軸に日本の音楽シーンは

図 1-2 ジャパメタバンド「聖飢魔Ⅱ」



出所：海外の反応ブログ

ロックの全盛期を迎える。このころにロックバンドが流行の音楽になる、という状況になる。

1-1-3 新たなロックバンドの在り方「お化粧品」

1980年代中盤頃から活動を始めたX(後のX JAPAN)、他にもDEAD ENDやBUCK-TICKなどのメイクをするバンドが登場し、知名度を上げ、メジャーシーンに上がっていくことで認知が広まりそれまであったバンドブームの流れも手伝い、奇抜なバンド群からひとつのジャンルとして確立していく下地が出来上がったのである。

この当時に活動していたバンドのメンバーたちは、少年期にジャパメタブームや先述のKISSなどのロックバンドを見聞きする世代であり、サウンドだけでなく外見などの部分に影響を受けた若者が中心となっている。

その後、1989年にXが表舞台に登場し、若い女性を中心に人気が出始め、メジャーシーンを席巻することになった。このころから彼らと同世代のバンドたちが同じようにメイクをして活動をし、同様の性質をもったバンドが多く表舞台に登場することになった。テレビなどをはじめとする各種メディアに登場する機会も多くなり、一つのムーブメントが起こった。このころにお化粧品という言葉によって彼らのバンド形態がカテゴライズされジャンルとして確立されて行くのである。

1-2 発展・ブーム

お化粧品は90年代に入りそれまで日本にあったパンクバンドブーム、ジャパメタブームに変わって台頭してきたジャンルといえる。また、このころは音楽シーン自体がバブルとも言える時期にあり、CDやライブチケットなどセールスが非常に伸びた時期でもある。その頃にお化粧品という言葉から転じてヴィジュアル系と呼ばれるようになった。

ヴィジュアル系という言葉自体にはいつ、誰が、どこでといった形で明確にはその発祥は不明である。音楽ライターであり、ヴィジュアル系を取材し続けていた市川哲史氏がその言葉を用いた説、Xのギタリストであった故HIDEが考案した「PSYCHEDELIC VIOLENCE CRIME OF VISUAL SHOCK」というキャッチコピーをもとにそこから生まれたとする説など複数存在しており定かではない。しかし、化粧をする、派手な衣装があるといった共通部分とそれまで日本になかった流麗な外見を前面に押し出したバンド形態が衝撃的な存在だったことは新たに言葉を生み出し、浸透させたことがそれを物語ってい

図 1-3 X(後の X JAPAN)



出所：Visual Kei Wiki

る。

ブームの起こっていたヴィジュアル系バンド、そして音楽バブルの存在によって多くのファンを獲得するに至るのである。

1-2-1 ジャンルの広がり

ヴィジュアル系の黎明期はパンクバンドから派生したバンド、Xのようなメタルに源流をもつバンドのように大きく分かれていた。やがて一般化していく過程の中で様々なジャンルを内包するようになってくる。まず代表的な存在としてLUNA SEA

図 1-4 LUNA SEA



出所：Ryemusics.com

GLAY はキャッチーなメロディを武器とし、

いわゆる J-pop によくなじむ音楽性を打ち出していく。また、Plastic Tree のようにシュゲイザーの要素を取り入れるなどするバンドも登場し、ジャンルの幅が広がっていく。

この流れを契機に 90 年代中盤ごろ一般にヴィジュアル系が受け入れられたところに様々な系統へ派生していくことになる。例として、表舞台で活躍したバンドを上げると、MALICE MIZER、SHAZNA、La'cryma Christi、FANATIC◇CRISIS などがあり、当時彼らのことをヴィジュアル系四天王という呼称を用

図 1-5 MALICE MIZER のパフォーマンス

いていた。MALICE MIZER は特にそれまでのバンドとは一線を画す形態の活動を行ってきた。音楽性はロックとクラシカルな音楽の融合を軸にしていたが、衣装なども徹底してその世界観にあうものにしていった。それだけではなく彼らの特筆すべき点はパフォーマンスである。ライブ中に曲によっては演奏することをほとんどせず、演劇、ミュージカル的なパ



リンク先：YouTube

フォーマンスをしていた。他にも SHAZNA はボーカルの IZAM が女装でメディアに露出するなどそれまであまりなかった方向性を示した。また、La'cryma Christi、

FANATIC◇CRISIS はそれまで多岐にわたった音楽ジャンル、といえどハードロック寄りだった音楽性の中でさらに一般的な音楽シーンになじみやすいポップス路線の曲を強く打ち出していくことになる。このようにその当時ヴィジュアル系のシーンを席卷していたバンドたちは音楽性だけでなく外見やパフォーマンスまでも独自の世界を貫いていった。とはいえ、ヴィジュアル系自体がポップス路線にシフトしたか、といえどそういうわけでもなく、DIR EN GREYなどはより攻撃的で重厚なサウンドを武器にしたメタルバンドとしてこの当時から今日まで存在している。

1-2-2 ブームの副産物

また、それ以外でも当時技術が優れていたバンドが知名度や、ライブ動員数を上げるためにヴィジュアル系のブームに乗っかっていたということもあり、それがヴィジュアル系の内包するジャンルの多様化をもたらしたと考えられる。特に Janne Da Arc や、SIAM SHADE などのバンドはその典型例である。この二つのバンドも卓越した技術を持っている実力派のバンドであったが、知名度を上げるためにヴィジュアル系バンドとして活動し、その後どちらもメイクすることに抵抗のなかったメンバー以外はメジャーデビュー後はヴィジュアル系メイクをやめ、ほぼ素顔のままライブやメディア露出を行っている。また、このころからヴィジュアル系のバンドの中でも活動形態や世界観、衣装や楽曲の雰囲気などによりひとえにヴィジュアル系といっても複数に細分化され始める。

90年代中盤から2000年代初頭までヴィジュアル系の発展は続き、それに呼応するかのようにブームは続いていくことになる。

1-3 ブームの終焉・再興

90年代で花開き、中盤で頂点に達したヴィジュアル系バンドブームは90年代後半に入ると陰りが見え始める。それまでヴィジュアル系バンドの頂点の存在であったX JAPANの解

図1-6 Janne Da Arcのデビュー当時との比較



出所：どちらもNAVERまとめ

散があった。また、2000年代に入ると黎明期に活躍した LUNA SEA などのバンドが次々と活動休止、または解散という形をとっていく。これによって 90年代に起こったブームは終焉を迎える。流行を追い求める層は次々と離れ、新たに発生した音楽のブームへと移動していくことになった。解散をしていないバンドは衣装などが奇抜なものを着用することを避け存続していくこととなる。ここで一旦ヴィジュアル系という音楽ジャンルが表舞台から去ることになるのである。完全になくなったかといえばそういうわけでもなく表舞台に上がることの少ないジャンルとして存在を続けて行くことになった。ここで今あるヴィジュアル系の閉鎖的な雰囲気を作りあげていったのではないだろうか。

1-3-1 次世代のヴィジュアル系

その後数年ののちに次世代のヴィジュアル系が少しずつ誕生していくことになる。2000年前後に結成、活動しているバンドは 90年代にあったメジャーシーンで頂点にいく、というよりはヴィジュアル系が好きな層に向けてセールスをしていくという方向にシフトしていくことになる。また、メイクや衣装も 90年代に比べ、派手さなどが若干落ち着いていくようになり、衣装の方向性に変化が生じる。だが、ジャンルの広さなどは継承されていくのである。彼らの事を「ネオ・ヴィジュアル系」と呼称するものもある。

彼らの活動が軌道に乗り始めた 2005年あたりから徐々にヴィジュアル系自体が再興していくことになる。前述のネオ・ヴィジュアル系世代は代表的なものを上げると、THE GAZETTE、NIGHTMARE、Alice Nine、Kagrraなどがあがる。彼らは 2013年現在も活動しているバンドも多く、特に THE GAZETTE はその代表的な存在である。現在 30歳前後の世代である彼らは、その音楽的ルーツが 90年代初頭に活躍した X JAPAN や LUNA SEA などにあることを公言しているメンバーも多く、それがきっかけでバンド、特にヴィジュアル系を始めた、というものがほとんどである。

図 1-7 THE GAZETTE



出所: 罪・ω・罰・Satan's nation・

1-3-2 活動の場の変化と再興

現在のヴィジュアル系は楽曲や詞の世界観から特にアニメの主題歌などのタイアップが多く、ヴィジュアル系の音楽を好む層だけでなく、アニメを見るオタク層からも支持を受けている、といった 90年代までとは少し毛色の違ったブームの起こり方がある。特にその層はある種のアニメグッズ集めと関わって彼らの楽曲を手にもすることも多く、また、購買

力をその一点に集めることも多いため、特に売上に関しては伸びることも多い。それにより、注目を集める存在という意味でメディアに登場することもしばしばある。こうした他のカテゴリーとの共存により、再興を遂げているのである。

また、ヴィジュアル系を愛好する女性は原宿系と呼称されるファッションを好む人も多く、原宿系のファッション雑誌にはヴィジュアル系バンドのメンバーがモデルとして登場したり、コラム連載を持っていたりもしている。

また、以前より派手さの落ちた衣装もあり、男性のファンも増えつつある。かつて渋谷系と呼ばれたファッションの中にあつたモード系のロックファッションが現在のヴィジュアル系の衣装に近いこともあり、そういった趣向に近い男性からもファッションなどの面から支持を集めている。また、そのファッション性を特に扱うファッション誌も存在しており、そこでもバンドメンバーがモデルで登場するなど、女性ファンが多い中、男性も目にする機会が増えている。

このように層を限定して活路を見出し、その活動を発展させているのである。

※資料の説明

図 1-8 上段は原宿系女性向けファッション誌『KERA』、下段は渋谷系男性向けファッション誌『MEN'S KNUCKLE』である。画像に載っている男性は全員ヴィジュアル系バンドのメンバーである。

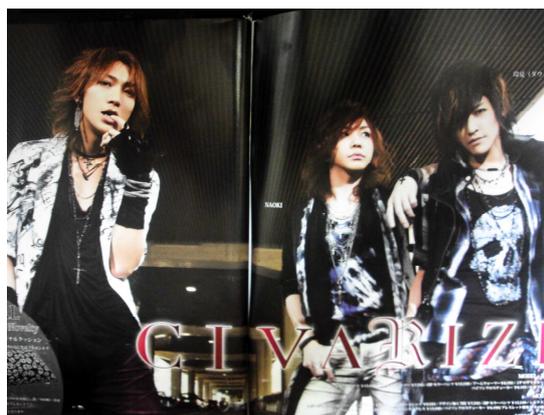
1-4 現在のヴィジュアル系

現在のヴィジュアル系はどのようになっているのか。基本的なセールスの方法は先述したものと大きくは変わらない。ただし、シーン自体には大きな変化が訪れた時期である。ヴィジュアル系として、ではなくある種の芸人集団として、としての見方が強いのもかもしれないが、ゴールデンボンバーのブレイクは大きな変化である。それまであつたヴィジュアル系に対するイメージを覆すパフォーマンスが受けたと思われるが、ブームの終焉から続いていた閉鎖的な雰囲気、アングラ感を払拭するには十分効果があつたと言える。少

図 1-8 バンドメンバーの乗る雑誌



出所：ガジェット通信



筆者私物雑誌より撮影

しずつ表舞台に出てきていたネオ・ヴィジュアル系世代のバンドたちをさらに押し上げる一因になった。また、2008年から最近に至るまでX JAPAN、LUNA SEAなどかつて全盛期の時期に頂点にいたバンドたちも次々と復活し、古参ファンはもちろんのこと、かつての全盛期を知らない10代の新規ファンまで新たに獲得している。

こうしたネオ世代、90年代ヴィジュアル系世代がバンド活動をしていくことによってヴィジュアル系シーン全体にまたかつてほどではないにしろ再興の兆しが見えてきているのである。

また、ここ数年V-ROCK FESTIVALというフェス型のライブも開催されており、シーン全体として盛り上がりとする機運も見ることができる。

また、最近では海外でライブを行うバンドも増えてきており、アニメなどの主題歌などで知名度を上げたバンドがヨーロッパなどに進出している。日本のサブカルチャーにあたるコンテンツを海外に発信するイベントが多く開催されているが、その中の一つのジャンルとして紹介されているのである。また、ヴィジュアル系バンドの衣装に近いモード系のロックファッションやそのファンの衣装などに代表されるゴスロリなど、発祥は海外にあれど日本のファッション文化と結びついて変化が起こったファッションも海外では受け入れられており、逆輸入されている。

国内、海外と最近では活動を広げており、ヴィジュアル系自体が広く知れ渡るようになっている。しかし、かつてのブームには程遠く、いまだ閉鎖性をぬぐえないでいる。次章からはその実態を書いていく。

第2章 ヴィジュアル系バンドの世界

2-1 ヴィジュアル系の定義と現在のシーン

ヴィジュアル系バンドを音楽ジャンルとして見ると定義することは難しい。というのも、1章でも述べたように内包しているジャンルがあまりにも多いためである。しかし、ヴィジュアル系という言葉を用いた別の視点からとらえるとその定義ははっきりすると考える。ヴィジュアル系バンドはつまるところ音楽ジャンルとして現在まで存在していたわけではなく、ファッションという存在にも近いものがある。ロックの内包している音楽的なジャンルに奇抜な外見が入り込んだものがいわゆるヴィジュアル系という呼称を得て音楽ジャンルのように見なされてきたということが言える。しかし、それだけでは違和感を覚える部分も多い。ファッションの側面から見ると、ヴィジュアル系は以下のように定義が出来る。

「派手さのあるメイク、奇抜な衣装をまとうロックバンドのこと。ただしメイクの仕方や衣装は攻撃性よりも耽美性が重視される。」

この定義で見ると、攻撃性の強い衣装をまとうジャパメタバンド(図 1-2 参照)はヴィジュアル系には当てはまらないのである。派手さはあるものの全体として美が強調され、独特な世界観につながっていくのである。

2-1-1 現在のヴィジュアル系

ヴィジュアル系の中には現在様々なコンセプトの元活動するバンドがあり、それぞれのバンドがそれぞれのコンセプトに合わせて衣装や楽曲などを作り上げている。例として、以下のようなバンドたちが見られる。

●コテビ系

「こってりヴィジュアル系」の略。おおよそヴィジュアル系の中ではスタンダードな形態。派手な髪色や髪型で、衣装は黒を基調としたものが多い。1章で述べた THE GAZETTE や NIGHTMARE などが例として挙がる(図 1-7 参照)。また、音楽性としてはラウド系と呼ばれるハードロック、メタルの要素が強いものがほとんどである。

●ソフビ系

「ソフトヴィジュアル系」の略。髪型や色、衣装などは比較的薄めで、いわゆるホストの衣装に近いものもある。モード系ロックファッションはこの形態の衣装に近いものが多い。例としては、Alice Nine. や ViViD などがいる。音楽性としてはコテビ系よりはややおとなし

図 2-1 ViViD



出所：exite music

く、ハードロックを基調としている。

●オシャレ系

メイクや髪型はコテビ系のそれに近いが、衣装が原宿系のもつ雰囲気に近いものがあり、ポップな絵柄のものや、グッズに身を包んでいる。例として SuG や Kra などがあげられる。音楽性としてはポップなものが多く、曲調も明るいものが多い。

●お耽美系

衣装、髪型などコテビに近いものがあるが、中世ヨーロッパを意識した衣装を身にまとう。世界観を重視する傾向にあり、音楽性もシンフォニックメタルなど管弦楽を取り入れた曲調のものが多い。例としては、Versailles があげられる。

●密室系

もとは密室ノイローゼというレーベルがありそこに属していたバンドたちに多かった傾向を総称したものである。ヴィジュアル系に良く見られる美を意識した外見とはやや方向性が違う。この形態をとるバンドは特に死と生などをコンセプトにあげることが多く、曲調、歌詞、衣装に至るまでダークな部分を強調した世界観となっている。主なバンドは、cali#gari やインディーズ期のムックなどである。

図 2-2 インディーズ期のムック



出所：隊長の横の人の暇なブログ

●ネタ・お笑い系

メイクや髪形などはヴィジュアル系だが、衣装やライブパフォーマンスで笑いをとることをコンセプトに活動している形態。ヴィジュアル系によく見られるダークさはほぼ皆無である。ヴィジュアル系の持つ美の部分とある種対極にあるお笑いのギャップが受けているものだと考えられる。今おそらく一番脚光を浴びている形態である。楽曲はとにかくノリがいいものでラウドさはあまりない。例としては、ゴールデンボンバー、仙台貨物などがあげられる。

●和風系

ヴィジュアル系たるメイク、髪型をしているが、衣装は和服、もしくは和柄のものを着用している。衣装などは和風とはいえ単色質素なものは少なく、絢爛な衣装が多い。また、世界観を強く前面に押し出す傾向があり楽曲もロックの中に和音階を多用したり和楽器を使用したり、歌詞も物語的なものを旧字体や歴史的仮名遣いで表現したり、歌詞から英語をはじめとする他言語を排除したりなどをして表現している。例としては Kagrra、己龍があげられる。

図 2-3 Kagra,

おおまかではあるが、これが現在のヴィジュアル系を構成するコンセプトである。『ヴィジュアル系バンドの歌詞は「墮落、害、憂鬱、死、罪」など暗い言葉が並べられていることが多い。』(山田,2012,29)というものが一般的なヴィジュアル系に対する見方であるが、その内情は決してダークなものだけではないということが言える。



出所 : lyrics search

2-1-2 「世界観」

ヴィジュアル系がヴィジュアル系である理由には他のバンドにはない「世界観」というものがある。各バンドがコンセプトを掲げ、それに合う歌詞、楽曲、衣装を選び、あるいは自らのキャラクターを設定してそれを演じる。これらの活動を総称して「世界観」と呼ぶのである。様々なアーティストが持っているものではあるが、ヴィジュアル系は特にそうしたものを重視する傾向がある。

2-1-2-1 歌詞

ヴィジュアル系の世界観を支えている重要な要素である歌詞について着目していく。楽曲の中での演奏技法や歌唱法などの方法でコンセプトを表すことはもちろんあるが、強く表しているのが歌詞の存在だろう。ここで一つ断っておきたいことであるが、同じバンドでもインディーズ期と現在では大きく歌詞に込めた意味が違うということがある。楽曲を調査していくにあたって、多くの傾向として見られたものが、強くメッセージ性を持つ歌詞のある楽曲は特に活動初期、インディーズ期に多く存在している。メジャーデビューを果たし、その後活動を続けて行く上で、心境の変化や表現方法の開拓、志向する音楽ジャンルの変化そのほか様々な制約により、直接的な言及を避けることが多い。聞き手側の判断にゆだねられることも多く、正確な解釈はほぼ不可能である。

先述の典型例に当てはまるのが本論文でも扱う THE GAZETTE である。彼らは初期、強いメッセージ性をはらんだものが多かった。初期の曲「泥だらけの青春」では「汚い権力を振りかざしている人。エリートのお前らが作り上げたルールを踏み外し、唾を吐き我道を歩くのさ！」や、「ダメな大人にはなりませぬ」などといった大人や社会への批判を歌うものが多い。また、舐〜Zetsu〜では、「僕の苦悩はやがて 自発的に管を切る 予定通りに僕を 壊して呉れたね」などやや死や精神異常を暗喩したような歌詞もあり、ヴィジュアル系の持つダークな世界を表現している。この時期には 10 代の若者のもつ苦悩や反抗を歌うものが多くそこに共感を得て知名度、人気上がることになったのだろう。メンバー自体がまだ 10 代から 20 代前半であったこともあり、そういった心境の歌詞を作りやすか

ったのではないだろうか。

しかし、最近の楽曲となると10代の持つ苦悩や反抗をテーマとすることはほとんど皆無である。このバンド自体、10年以上のキャリアを持つバンドであるために、楽曲はもちろんのこと、歌詞表現にも変化が起こっている。さらにバンド自体を取り巻く環境の変化による制約等もあり、直接的な言及は避ける傾向にある。また、雑誌等の取材で意味合いを明かすこともあり、社会問題などのテーマを取り上げることが多い。「THE SUICIDE CIRCUS」という曲(2011年発売アルバム収録)では雑誌のインタビューで作詞者であるボーカルのRUKIは『THE SUICIDE CIRCUSは『見世物』という意味なんです。要はテレビだったり何だったり、流れてくる情報や映像に対して、人の感覚がだんだん麻痺してくる状態を描いてるんです』(音楽専科社,2011,40)というように説明している点からメディアに関する批判の内容と読むことができ、またタイトルから自殺などの人の生死に関わる報道に対する批判的な意味合いが強く現れている。「噓せ返るような生々しさに人は惹かれその触れた手に付着した恐怖もやがては薄れ」という歌詞は「生々しい映像に人は興味を惹かれ、人が死んだという事実に対する恐怖は、やがて薄れていき、変化していく」というように言い換えることができ、本来恐怖すべき対象であるはずの死に関するニュースを大々的に取り上げることで視聴者のあおり、また視聴者もより過激なものを求めるといった構図を批判している。このように社会問題をテーマにした歌詞も多くなっている。しかし、根底としては初期は大人への批判、そして最近のものは社会への批判など批判的なメッセージを持っているものが多い。このようなメッセージ性に惹かれる若者も多いのではないだろうか。

ここでやや趣向を変え、Kagrraの楽曲の歌詞も紹介していく。Kagrraは和風系バンドとして活動していた。(2010年解散)和の世界観を強く前面に打ち出した歌詞が特徴である。「月に斑雲 紫陽花に雨」という曲では「艶めく月を抱く 淡い斑雲 そつと薬へと雪ぐ霈のように この私も独り 翳り萎れる 逸そこのまま融けて 無空に消えたい」という歌詞がある。このように作詞者のイメージした情景を歌詞にして歌うバンドであるためメッセージ性は薄いが物語調であったり、また和風をコンセプトにしているところから普段見かけることのない漢字や曲によっては旧字などを多く用いている。和の美しさを徹底して楽曲に込める、といったようなバンドは多く存在しており、ヴィジュアル系に関して言えばメッセージだけでなく、バンドの持つ「世界観」に共感していることが言えるのではないだろうか。

このようにバンドごとのコンセプトにそった歌詞があり、どのバンドが自分の趣向とする世界に合うか、といったところが支持の根源であると思う。極端な例示であったが、ヴィジュアル系の歌詞はやはり否定的な意味を持つ言葉が多く、それがグロテスクなものであるか、反社会的なものであるか、死を扱ったものであるかといった違いがそれぞれのバンドの志向の違いにつながるのだと思う。ただ、こうしたバンドはヴィジュアル系に以外にも存在しており、ヴィジュアル系ならではの特徴は、という言葉選びである。抽象的

な言葉が多いが、そのまま表現するのではなく、否定的な語句を美化する表現に変えて表現することが多い。ヴィジュアル系の根底にある美意識が言葉選びにも影響していると考ええる。

2-1-2-2 楽曲・パフォーマンス

ここでは楽曲に関して考察していく。ヴィジュアル系の楽曲作りはかなり独特であると思う。仮に外見が普通のラウド系のバンドとの楽曲を比較してもその構成には多くの違いが見られる。特にメッセージ性が読み取りづらくなったバンドに関しては特にその傾向がある。いかに独自の世界を持つバンドといってもショービジネスの中にあることは明白である。メタルなどによく見られるヘッドバンギングという行為はメタルを志向しているバンドならば当然取り入れる行為である。観客の反応や楽曲の雰囲気で行うのが一般的であるが、ヴィジュアル系の楽曲の中には、ヘッドバンギングを行うフレーズがある楽曲が多い。見ている観客はそのフレーズに差し掛かるとほとんど全員ヘッドバンギングを行うのである。また、ラウド系以外のバンドでよくみられる行為としては、「咲き」と呼ばれる振り付けにも似た行為がある。このような行為を起こさせるように楽曲を構成するバンドも少なくない。中にはDVDやYouTubeなどの動画の中で楽曲の振りをメンバーが解説する、といったものも存在している。

また、音に関して言えば、ラウド系の特筆すべき点は低音でチューニングされたギターやベース、過激に歪ませたギター、激しい楽曲にマッチするツーバスドラムなどとにかく音が重たい。この重たい音の中で否定的な意味を持つ歌詞をシャウトやデスボイスといった叫ぶ歌唱法で歌うことでよりダークな世界観を演出している。ラウド系以外のバンドであれば、例えば前述のお耽美系でいえば、ストリングスを多用したり、和風系ならステージ上でメンバーが実際に琴を弾いたりするなど音の面でも世界観を演出している。

2-1-2-3 衣装・メイク

衣装やメイクはヴィジュアル系としての大前提の存在である。ファッションとして定義すると、この二つ抜きでヴィジュアル系を名乗ることは不可能である。ヴィジュアル系一般に関して言えることだが、メイク、とひとえにいってもメタルバンドに散見するようなものではなくとにかく「美」が重要な要素となる。メイクをして中性的な印象を目指すのではなく、男性的であるも、ある種アニメキャラのような現実感をなくした存在を目指している。女形(おんながたと読む。)となるバンドメンバーもいるが、それは完全に女性的な美を目指している。

こうした現実感のない美を得たメンバーたちが、楽曲の項で説明したような激しいパフォーマンスや趣向を凝らした世界観を歌うことがヴィジュアル系の独特な雰囲気を生み出しているのである。

また、黎明期と現在では方向性に多少の違いはあれど、それまで日本のハードロックにはなかった美形なロックバンドが女性たちの支持を集めることになった。

また、バンドメンバー自体も黎明期は海外のバンドに影響を受けメイクをして活動を始めたものも多い。そしてその後の世代のヴィジュアル系バンドは黎明期のバンドに影響されるなど、世代を超えて継承されている。

歌詞・楽曲・衣装などを総合したものがヴィジュアル系を構成し、定義づけているといえる。

そこには「世界観」と呼ばれるものが強く関連し、その前提に美があり、現実離れ、非日常を演出する。ここにヴィジュアル系が独特の世界となる要素があるのである。

図 2-4 己龍・一式日和



出所：VisuLog

2-2 ヴィジュアル系を構成する若者たち

ヴィジュアル系バンドは美を前提とするバンドであることを取り上げてきた。ではヴィジュアル系を構成している担い手にはどのような人がいるのだろうか。時代によってその性質も変わりつつあるようである。

2-2-1 黎明期～最盛期のヴィジュアル系

この項では現在 50 歳代前半～30 歳代後半の層にスポットを当てていく。彼らが少年期・青年期を過ごした 1980 年代の若者を取り巻く状況を見ると、社会問題化していた事象として暴走族の存在があげられる。社会の型や、規則から逸脱することを意識した彼らの活動は大きな問題となっていた。そういった若者をすぐ上の世代に持つ彼らは彼らの行動をみて育つことになる。また、同年代の友人もまた、その活動に参加することもあった時代である。また、その頃にはパンクバンドなどをはじめとする反社会性を歌う音楽が流行にもなっていた時代である。今の時代にも言えることだが、学校に通い、社会や学校のルールに従い、大学へ行き、その後よりよい就職をするというコースを“普通”とするならば、バンドで生計を立てるということは社会の“普通”から逸脱することを意味している。この当時の若者はこの“普通”に対し、暴走族という形で反抗をした。その裏で、バンドを志すものが現れ始めるのである。この当時、いわゆるヤンキーと言われた若者たちは、ギ

ターかバイクを選ぶ志向が強かった。こうした背景から初期のヴィジュアル系には反社会性を歌うものが多いことがいえる。ヴィジュアル系の衣装は各バンドがそれぞれのジャンルで活動しているはずが、今のように細分化されることも無かったため、共通点が多く見られる。X や COLOR はそれぞれジャンルが違っていたが腰ほどまで伸ばした髪を逆立てる、派手な色に染髪する、派手な衣装を着るなどの共通点が多く、外見上も非常に似たものが多かった。

また、このころのヴィジュアル系を構成する若者は先述のとおりヤンキー気質が強く、ライブでは様々な問題を起こすこともしばしばあった。ライブハウスの設備を破壊したり、酔った勢いで殴り合いのけんかをしたりなど、かなり荒かった。

ヤンキー気質もあるため、バンド同士の関係性は組織立っており、上下関係が厳しいものであった。先輩、後輩関係が強力に結んであり、そこになじまないものは時には暴力的な手段を使って制裁が加えられたこともあったという。しかし、上下の結びつきが強いために先輩が後輩を育てる、という部分もある。また、同世代の中では集客力の強いバンドが力を持つ構図があったために、上昇志向がとても強いバンドが多かった。構成している年代は 10 代後半から 20 代前半とかなり広く、またヴィジュアル系自体がはやっていたこともあり、規模は大きかった。

2-2-2 停滞期～現在のヴィジュアル系

最盛期後に活動をし始めた世代にスポットを当てていく。現在の 30 代前半～10 代後半までがこの世代にあたる。全体的にはやりも落ち着いたところにバンド活動を行う若者たちである。特に現在の 20 代から下の世代に強く見られる傾向であるが、かつてあったヤンキー気質は皆無である。バンド同士の干渉が少なく、バンドごとの上昇志向よりもヴィジュアル系シーン自体の上昇を重視する傾向にある。とにかく、流行りのものでなくなった以上、若手のバンドが少ない状況にある。そのためかつてあった強烈な上下関係は無くなってきている。技術の発達もあり、家で手軽にプロの環境に近い録音ができるようになったこともあり、パソコンに精通したオタク層が担い手として多くなっているという。メジャーなバンドに在籍するメンバーもアニメ好きを公言するなどかつてとは違う性質がよく見られる。そういった背景からアニメソングのタイアップにも積極的であり、また、そのタイアップに適した曲を提供していたりもする。

上下関係が強くないため、活動歴が上下になるわけではなく、単に集客力がバンドの上下につながっていくことが多い。この上下関係もかつてのような強固なものではなく、より大きなイベントへのブッキングが出来る、といった程度のものである。

構成している層は 20 代が多く、10 代は少ない。ヴィジュアル系自体がアングラのような立ち位置にいる昨今憧れをもつ 10 代が少なく、後継は少ない。

ヴィジュアル系自体が X や LUNA SEA などのバンドが絶対的な地位をいまでも持っており、活動もできる状態であることでそれを超えることは今の時代不可能に等しい。そし

て人気が下火になりアングラ化したことでヴィジュアル系をまた表舞台に戻すことをしなければ自分たちの浮上も無い難しい世代である。

また、かつては通信手段がなかったために地方のインディーズバンドでもライブでしか会うことのできないある種神のような存在だったものが、今ではメールや SNS などを通じ交流できる状態にあり、メジャーなバンドならば価値のあることになるがインディーズのバンドではバンドをやっている友人程度の存在となってしまう、バンド自体の価値を下げることにつながってしまう。そのような状況の変化も相まって、現実離れした存在が現実になるという問題も発生している。

2-2-3 性別からみたヴィジュアル系

ヴィジュアル系というものの自体、実のところ男性文化なのである。かつてロックバンドを志向した女性は数多くいたし、商業的にも成功したガールズバンドは多く存在した。しかし、ヴィジュアル系で、というくくりで見るとほとんどいないのが実情である。全くいないわけではないが、衣装やメイク、髪型に至るまでほぼ男装したと言っても過言ではないものになっている。図 2-5 のバンドは全員女性で構成されている、ラウド系バンドである。

そもそも、ヴィジュアル系の黎明期のバンドたちはそれまでのバンドとは違ったきれいな外見をしているため、ある種のアイドルとしての女性人気を得ている。演者が男性、観客は女性という構図は黎明期から現在に至るまでの 20 数年大きくは変化していないのである。

2-2-4 ヴィジュアル系バンドの生活

ヴィジュアル系といえども、芸の道であるため他のジャンルと共通してバンドだけで生計を立てているバンドは一握りである。それを目指すべく日々活動しているが、金銭的な問題からは逃れられることはできない。バンドに集中するために、正規雇用よりも非正規雇用を選択する若者が圧倒的に多い。ヴィジュアル系バンドはそのジャンルの特性上、髪が長かったり、派手な色をしていたりなど日本でアルバイトするうえではかなりの制約がかかる。また、中性的な面を持つために日焼けを嫌うなど多くの制約がかかる。深夜の清掃業など人前に出ないうえ、日焼けもしないアルバイトに従事しているバンドマンも多い。バンド活動していく上でもライブハウスの使用料や衣装代など支出も多いため決して一般的なフリーター並みの生活がおくれているわけではなく、厳しい生活水準にいるものも多い。

図 2-5 EXIST + TRACE



出所 : Visual kei wiki

2-3 まとめ

この章ではよりヴィジュアル系の内情を書いた。ヴィジュアル系自体は一つの要素のみに共感を得て活動しているわけではなく、音の面や、衣装など全ての要素を含めてヴィジュアル系として受け入れられているのである。

また、ヴィジュアル系自体のバンド間の相互関係は若者個人間の相互関係の変化に似ているものが見受けられる。かつての友人間の人間関係に見られたある時は対立することもあるがお互いが支え合って良好な関係を築こうとする態度、いわゆるホットな関係がバンド間にも見られたが、現在のバンドの相互関係はお互いの対立を避けるために気を遣いながら程よい距離で付き合う態度、いわゆるウォームな関係を見ることができる。ヴィジュアル系自体が下火になっている昨今、そして構成している若者たちの気質の変化などもあり、このような関係性を作り上げるようになっている。

第3章 ヴィジュアル系バンドのファンの世界

ここではヴィジュアル系バンドのファンについてみていく。バンドを支持するファンはどのような特色があり、独特の雰囲気を醸し出しているのだろうか。バンドとファンの関係も含めて明かしていく。

3-1 ヴィジュアル系バンドのファン

ヴィジュアル系バンドのファンは現在、女性が非常に多い。事実、ライブ会場などに足を運ぶとそのほとんどが女性である。外見が美しい男性のバンドということもあり、女性ファンがつきやすいという傾向は前章で述べた。このことが元となり、彼女たち、もしくはヴィジュアル系の内情を知る人からは、“バンギャ”、“バンギャル”という呼称でカテゴライズされている。もともとこの言葉は、バンドを見に行くことを好む若い女性を指して作られた言葉であるが、現在では特にヴィジュアル系を好む女性を指すようになっている。

3-1-1 バンギャルとは

バンギャルとはバンドギャルの短縮語である。ヴィジュアル系バンドを好む女性を指して使われている。しかし、ヴィジュアル系を好む女性を総じて呼称するものではなく、個々の意識の問題であると考えられる。SNS等のプロフィール欄にはヴィジュアル系を好む表記が書かれてあっても熱を入れて支持しているわけではないために、自らをバンギャルとしない女性も存在している。ヴィジュアル系を熱を入れて支持し、なおかつ周囲の評価を気にせず自らをバンギャルとして認知、公表することがバンギャルになる条件のようである。こうした女性の事をバンギャルと呼び本論文でもそう記述する。

図 3-1 ゴスロリファッション

3-1-2 バンギャルの行動

3-1-2-1 服装

バンギャルは他のバンドファンには見られない行動をすることがある。特に顕著に表れるのがライブの時である。まず特に顕著なのが衣装である。曲調やライブの雰囲気に左右されることはあるが、おおそ多くのロックバンドのライブに参加するときは腕を上げたり、激しい曲調のものであれば時には体をぶつけ合ったりするモッシュなどで声援を送ったり、一体感を味わうことが多い。そのため、服装はTシャツ、ハーフパンツ、スニーカーなど比較的動きやすいもので参加する者が多い。ヴィジュアル系バンドは特にメタルに源流を持つバンドも多いため、日本の音楽シーンの中では特に激しいバンドが多いカテゴリーでもある。このようなカテゴリーのバンドのライブに参加するバ



出所:KERA SHOP

ンギャルたちは激しいバンド向きではない服装をしている。最もよく知られている服装といえばロリータ系であろう。ロリータ系の服装には内包するサブカテゴリーがあり、ゴスロリ、甘ロリなどがある。ロリータ自体には少女趣味的な服装、幼少のころに思い描くお姫様的な趣向を持った服装が多い。そこに加えて、黒を基調としたり、十字架、髑髏のモチーフを加えることでゴスロリとしたり、色遣い、服のデザインが特により少女趣向を強めたものを甘ロリと呼ぶ。またパンク系と呼ばれる服装をする者もいる。音楽ジャンルであるパンクとは少し違って、髪を派手に染めたり、スタッズを多く使う服装を好んで着るなどの傾向がみられる。また他にも各バンドのコンセプトに合わせた衣装を着るバンギャルも多い。例としては、和風をコンセプトにしたバンドである **Kagrra**、に関してはライブ会場を見渡すと、冬場なら振袖、夏場なら浴衣や甚平などの服装に身を包みライブに参加する者が多い。また、各ライブのメンバーの衣装を着て、髪型やメイク、小物に至るまで自作、あるいは既製品の作り替えなどの手段を使いメンバーのコスプレをする者もいる。また、メンバーでなくともパーティーグッズなどにもあるメイド、着ぐるみといったコスプレをする者もいるなどほかのロックバンドにはなかなか見られない服装で参加しているバンギャルも多いのである。当然ながら動きやすい服装で参加しているバンギャルもいる。また、服装に合わせてヒールなど他人に危害を加えかねない靴はライブ前に履き替えるなどマナーを守る行動もある。

図 3-2 パンクファッション



出所:KERA SHOP

また、一部のバンギャルの中にはゴスロリなどの服装を自分の趣味として着る人も見られ、普段着として着ることもある。また、パンク系の服は手に入りやすいこともありその上デザインが際立っているわけではないため、普段着との親和性も高く、常に服装がパンク系、といった例も見ることができる。

3-1-2-2 ライブ中の行動

ライブ中は一般的なロックバンドの場合、腕を振り上げて声援を送る、手拍子、激しい曲ならモッシュ、ヘッドバンギングなどが一般的に見られる現象である。これは当然のことながらヴィジュアル系のバンドのライブでも見られることであり、ライブ中は多くみられる。しかし男女の構成比が圧倒的に女性の方が上回っていることも関連して生まれていった声援の送り方も存在している。まずヘッドバンギングの仕方であるが、腰や首を支点にして頭を前後に振るのが一般的に言われているヘッドバンギングであるがバンギャルな場合、女性ということも関連し、長い髪を前から見ると「∞」の軌道で振るヘッドバンギングをおこなう。また、いわゆる「咲き」と呼ばれる振りである。比較的激しくない楽曲

で見られる現象である。両手を上にあげ、花が咲いているようにひらひらと動かす動作である。他にも、振りの中に手でハートマークを作りアピールする動作や、曲ごとの振り付けをバンドメンバーが指定してそれをライブまでに覚えてきたり、ファンのつながりの中で定番化し出来上がった声援のやり方があるなど組織立った行動が行われていたりもする。**THE GAZETTE** のライブでは土下座を激しく繰り返すいわゆる「土下座ヘドバン」と呼ばれる行為もライブの中で生まれ定番化していったものである。また激しいライブの中で身体がぶつかり合うこともあるが、その中で乱闘が起こることは少なく、「お互い様」という気持ちの上でそこからつながりが生まれることがある。

3-1-2-3 バンギャルの購買力

ライブ前後などには物販でライブ会場限定のグッズが発売される。これらはライブ会場に足を運んだバンギャルには必須のアイテムとなっている。グッズを全部買う人も少なく、またバンドメンバーの映る即席写真(通称：チェキ)をトレーディングカードのように集めるなど多くのグッズを買い求める。また、CD ショップに売っている CD(彼女たちの間では音源と呼ぶ)の特典付きのもの、通常版など数タイプ出ているものは全て買うというバンギャルも多い。また、各ライブでの演奏楽曲、またはそれらの順番(セットリスト：略してセトリ)が異なるため、全国を回るツアーが開催されれば全ての会場のチケットを押さえ、ライブに参加する”全通”と呼ばれる行為や、また全通ではないにしろ最寄りの会場だけではなく他県まで足を運ぶ”遠征”と呼ばれる参加の仕方をする人もいる。ヴィジュアル系のファン層はここまで数回指摘してきたとおり、10代から20代前半の層が中心であり、自分で自由に扱える金銭は決して多くない。しかしこれらの目的を達成するために自分の持つ購買力を一点に集める、といった方法をとる人が多いのである。20代前半頃になると10代の頃よりは購買力も付いてくるため、よりバンギャルとしての活動を深化させていく人もいる。

3-1-2-4 情報と繋がり

バンギャルたちはどのようにバンドに関する情報を得ているのだろうか。90年代から今まで大きく変わっていないのは雑誌の存在であろう。ヴィジュアル系バンド専門の音楽情報誌では『SHOXX』、『Cure』などがある。また音楽情報誌の中でも『ARENA37°C』などはヴィジュアル系に関する記事を積極的に掲載した雑誌でもある。こうした雑誌を軸にして彼女たちは情報を集めているようである。しかし、近年ではレーベルからのメール、ツイッターなどのツールが発展したため、休刊になる雑誌も増えてきており、今ではインターネットによる情報収集が専らである。

バンギャルは90年代のころから集会を開くなどの活動をしていた。集会には前述したバンギャルの服装やコスプレイヤーなどが集まり、バンドに関する情報交換やコスプレ撮影会、グッズ交換などを行っている。もともとはインターネットが普及する前は雑誌などの文通相手募集欄で見つけた友達のつながりで集会に参加していた。インターネットの普及

した現代では「オフ会」というような様相を呈している。また、かつてヴィジュアル系ブームの時はコスプレをしながら街で集まる集会もあったがブームが下火になるにつれ、コスプレイヤー自体が減ったこと、傍から見れば物珍しい恰好をしているためインターネット上に晒されるなどの実害も出始めたために廃れてしまい、今では集会やライブ会場で見られなくなった。

3-2 バンギャルを構成する人達

3-2-1 バンギャルの世界の構造

バンギャルの世界にはいろいろな側面から見た構造が存在する。いくつか例を挙げて見てみたいと思う。

●年齢、ファン歴による構造

ヴィジュアル系がカテゴライズされてから 20 年以上が経つ。そのため、バンギャルのファン層はかなり広いのである。10 代から 20 代が多いと述べてきたが 20 年前から続けてファンである人も当然いるのである。単純に考えるとヴィジュアル系ファンは 10 代から 40 代までがファンの年齢層と言えるのである。その中にも呼称があり、20 代前半までの年代を特にバンギャルと呼ぶが、それ以降の年代はオバンギャ、さらに上になるとババンギャという呼称を使うことがある。しかしこれはどちらかというと自嘲的な意味合いを持つ場合、バンギャル層がある種のレッテルとして用いる場合、などがある。また年齢に関わらず新しいファンを新規と呼び、なじみが薄くバンギャル内で出来上がった秩序だったものを知らないうちに破ることもあるためそこにはある程度のレッテルの意味合いを含んでいる。いずれにせよかつての自分や将来的になっていく自分の姿に対して批判をしているような皮肉な現象なのである。とはいえ、秩序を守り、一緒に楽しめる新規は歓迎される傾向にあり、むしろ仲間としての地位を確立することができるのである。この傾向は特にメジャーアーティストよりもインディーズやアマチュアで活動しているバンドのファンに多い。ちなみに、日本で最高齢のバンギャルは、東海林のり子氏である。彼女に関しては黎明期のころから叩かれがちだったヴィジュアル系を積極的に取り上げ、しかも偏見ではなくいい側面をレポートしていたことにより、バンギャルの中でも伝説的な存在として認知され、「ロッキンママ」という愛称で親しまれている。

●コスプレなど外見に関わる構造

最近では前述したとおりコスプレ自体が廃れてきているが、やはりバンギャルたちは相応の格好をしている。コスプレをするバンギャルたちにとっても本人たちの衣装の材質やメイクの仕方などの研究、自分の顔の雰囲気や体格などに違いが出るため、完成度はしばしば話題になる。その度合いによってバンギャルたちの中にある種カースト的な階層を意識する者もいるのである。

特に上記の条件をすべて満たし完璧なまでのコスプレをするバンギャルにはモデル並みの人気を博することもすることもあるようで、インターネットが家庭に普及し始めた 2000 年前後特に見られた現象であるが、コスプレをする本人たちのサイトにはそこに入り浸るコスプレに対するファンも表れ、その界限では有名人になることもあった。また、コスプレ自体はバンドマンの舞台衣装を模したものが多いため、既成品などで再現することはほぼ不可能に近く、自作するしかない。過去に自作した経験のあるバンギャルたちも少なくなく、その経験を生かして、服飾業界で働く者もいるようだ。また、コスプレが見栄え良く見える＝顔や体格など外見が優れているという図式が成り立つ者もいるため、実際に雑誌などでモデルとして活躍する者も存在している。

●男性ファン

ヴィジュアル系のファンの中には完全に少数派ではあるが、男性ファンが存在する。男性ファンの事はバンギャルに対して”ギャ男”と呼ばれている。ファンになった動機に関して言えば、ハードロックやメタルが好きで楽曲がそういう指向だったため聞き始めた、派手めなファッションが好きだった、というものがほとんどである。周囲は圧倒的に女性が多いためライブのノリにも控えめであったりするが中には女性に交じって咲きなどを行う者も多い。基本的には彼らは CD の購入とライブ参加を専らとするものが多い。というのも、女性ファンが多いことのためにツアーグッズも女性向けの商品が多かったり、サイズ感が小さめであったり男性が購入したがるものは品薄だからということがある。また、圧倒的に少ないために一緒にライブに参加する同性の友人は少なく、ひとりで参加、または女性グループに交じっての参加、という形で落ち着くのが多いのである。

3-2-2 インターネット上でのバンギャル

インターネットが発達した昨今、バンギャルのつながりもまた、インターネット上で見られるようになった。特筆すべきは交流の第一段階である SNS 等の自己紹介欄である。自己紹介欄には好きなバンドを羅列、時にその程度を表す”神盤”、”大本命盤”、”本命盤”、”別格盤”などに分けて表記することも多い。「盤」はバンドを意味し、そこに連なる言葉が好きの度合いを表している。自分の中でランク付けを行い、それが他人の目に触れることで共通の趣味の個人を見つけ出す、あるいは見つけ出してもらうのを容易にする、という目的がある。また同じように書かれてあるのが個人の性格に関係することである。性格等の項目には「病み」「メンヘラ」「精神異常」などの文言が並ぶ。ヴィジュアル系自体がダークな世界を持っていることに関連してこの世界に染まってしまうことも多い。とくに染ま

図 3-3 コスプレイヤー



出所: silver cat.

りやすく自己顕示欲の強い性格の者は自傷行為をブログ上で画像付きなどで公開してしまう人もいる。また、ヴィジュアル系自体がダークな世界や受け入れられがたい外見をしていることもあり、バンドに対してもライブに参加することに関しても親など周囲の大人からの反対を受けることが多く、彼女たちの中に「彼らを理解できるのは私たちだけ」という意識が発生するのである。特に90年代のヴィジュアル系に関しては不良の文化とみなされていたこともありその意識が強かった。そうした意識もあり、彼らの織りなすダークな世界にはまり、それに関連する文言がSNS上のプロフィールに並び、自傷行為などにつながっていくのである。

図 3-4 SNS 上のプロフィール(一部)



出所:mixi

インターネット上の掲示板も活発に交流がなされている場である。ライブなどのセットリスト、グッズに関する情報交換やオフ会などの企画、バンドに関する雑談などが交わされている。特に女性が多いことも起因してか、掲示板が荒れるときにはバンドマンの女性関係の噂話などで荒れることが多い。だいたいの場合噂話で終わることの方が多く、バンドとファンの距離感は現在では適切な距離を保っている。(もちろん、全てがそうとは限らない。)また、昨今ではバンドマンがツイッターなどのSNSに登場することも多くなってきている。宣伝効果を見越しての事もあるが、より身近な存在になってしまっているのも事実である。今まではどうにかコネがないとバンドマンと連絡すること自体不可能であったが、今では気軽に連絡を取れるようになっている。中には友達のような関係を築いてしまうバンギャもいるようだ。

3-2-3 他のジャンルとの比較

これまではヴィジュアル系をその内部事情に焦点を当て見てきた。ここでは他ジャンルとの比較を行いたい。そこで今回例としてあげるのがジャニーズの熱狂的なファンである、通称”ジャニヲタ”である。演者が度合いの違いがあるにせよ容姿の優れた男性、そして聴衆のほとんどが女性という同条件の中、なぜ彼女たちはジャニヲタ、バンギャルを選んだのかということを見ていく。

3-2-3-1 求める位置づけの違い

ジャニヲタとバンギャル、彼女たちは何をそれぞれの演者たちに求めているのだろうか。まずジャニヲタに関してである。

ジャニーズはグループ全体的に見ると構成している演者たちの年齢層は 10 代前半から 40 代とかなり幅広い。これがジャニヲタ達の求めている方向をある程度決めているのである。10 代のグループに関して言えば同年代の少女たちは「こういう男の子がクラスにいたらいいな」などの憧れを持って支持しているのである。また、その上の年齢層になるとある種母性的な感覚で見ている女性が多いという。「こういうかわいい弟がいたらいいな」などの年下に対する憧れだけでなく「ここで映れば〇〇くんなら目立てるのに！」などアイドルとして育っていく過程を楽しんでいる様子である。その逆に自分より年上のグループ、特に 20 代以降のグループでは「こういうお兄さんがいたらいいな」などの憧れを持っている。

対してバンギャルたちはバンドマンに対しては、そもそもバンドマンの構成している年齢層が 10 代後半から 20 代前半に偏っていることもあり、またアマチュアの時代から自分たちでプロデュースしてきていることもあるため、完成された世界を求めているようである。同じように憧れであっても、どちらかというと同次元にはいない、アニメや漫画のキャラクターに近い印象で見ているようである。アニメや漫画に出てくるような美青年が目の前にいる、ということが憧れの前提となっているようである。また、それに近い衣装をするために、聴衆であるバンギャルたちもその世界に入り込もうとする。ここに決定的な違いがあるのである。ジャニーズは身近な男子を極限に美化したものであり、バンドマンには完全に手の届かないアニメや漫画にいそうな美青年たちを三次元化したもの、という位置づけを求めていることがわかる。

3-2-3-2 共通するファン心理

まず好きになった動機であるがこれはおおまかに言うとジャニヲタもバンギャルも大きくは変わらなかった。最初は雑誌やメディアなどの写真や映像に関してファンになり、音楽やライブなどに興味を持つ、という流れが共通していた。しかし、バックグラウンドに何があるかでジャニヲタとなるかバンギャルとなるかには違いがみられるように、アニメや漫画の特に現実離れした美青年が好きだとバンギャルになる傾向があるようである。『バンギャルちゃんの日常』の作者の蟹めんま氏は著書の中でこのように述懐している。「こいつらは人間だろうか アニメの世界から来たのではないか 幽遊白書のキャラにいそうというのが第一印象であった」(蟹めんま:2012:18)このような存在がしかも男であるというところに衝撃を受け惹かれていったという。バンギャルの中にアニメや漫画のオタクが多いのもこのためである。

また、ライブに参加する衣装に関しても意味合いの違いはあれ、どちらにせよその世界が好きということを表現する手段になっている。ジャニーズでいえばグループのメンバーそれぞれにあるイメージカラーの服装や小物を見に付ける、特攻服のようなものに文字を入れ愛を表現するなどの方法を使って応援の意味合いを込めている。これはある種バンギャルのバンドマンのコスプレに近いものがある。また、どちらも自作する者もいる、とい

うところに共通する部分を見ることができる。結局、衣装に関しては応援の意味を込めたツールであり、それを表現する、表現したい度合いによって作りこまれていくものといえる。

また、グッズや CD などの通常盤と限定版を一緒に買うなどの行為もまた、同様に購買能力を一点に集めていることもあるため共通して全タイプ購入などをおこなうファンもいるようだ。

3-3 海外のバンギャルたち

様々な情報が国境関係なく行き来できるようになった昨今、海外にもその活動を広げるバンドも少なくない。また、そもそも海外を拠点に活動しているヴィジュアル系バンドもある。そのため、海外にもバンギャルは存在している。

海外向けに日本の文化を発信するクールジャパンにおけるファッションの分野と融合して紹介されることが多い。様々な国や地域の中でファンが集まるフォーラスがインターネット上で公開されている。また、日本文化に対し理解が進んできている昨今、X JAPAN などは **Japanese Metal** として紹介されていたものも **V-kei** や **Visual Kei** などの言葉が通じるくらいまでには浸透している。また、もともと西洋の服をモチーフにしたゴスロリなどの服装も逆輸入のような形で紹介されている。それに加えてアニメなど他のサブカルチャーと一緒に輸出されていったこともあり、それらに対する憧れのような感情でゴスロリ服やコスプレを楽しむファンも多い。

しかし、この状況は決して良い面だけがあるわけではなく、楽曲自体が日本のレーベル発ということもあり、入手が比較的難しい状況にある。You Tube などで知る者も多く、権利等の関係では好ましい状況にはなっていない側面も持ち合わせている。

ただ、このジャンルに対する認知は広がっている、ということは言えるだろう。

3-4 まとめ

この章ではヴィジュアル系バンドのファン＝バンギャルに関して取り上げた。バンギャルたちは様々な手段を使って応援、支持を表している。奇抜な服装も、目をそむけたくないような行為も全てバンドを支持し、その世界を支持しているからの行為なのである。また、ジャニーズのファンと比較することでバンギャルたちが何を求め、美しい青年たちで構成された世界に行くのか、ということを改めて確認できた。現実からの逃避、そしてその場を与えてくれるバンドに対する還元(CD 購入など)のサイクルがあるからこそ、彼女たちはまたバンドを見にライブへ参加していくのである。

第4章 ヴィジュアル系の閉鎖性

ここまで見てきたヴィジュアル系のバンド、ファンの内情から1章で指摘した閉鎖性についてこの章では考察していきたい。

4-1 閉鎖性

閉鎖性とはここでいう閉鎖性とはヴィジュアル系のシーンの中にある一般的な聴衆層がなんとなく入り込みづらいついてしまう独特の雰囲気のことを指す。このことをいくつかの視点から考察していく。

4-1-1 シーンの内側から見た閉鎖性

1章で述べたとおりヴィジュアル系というジャンルはかつて日本の音楽シーンの中でも流行の音楽としてとらえられてきた時期があり、90年代に特にメディアでも扱われることが多かった。その後2000年代に入り徐々に人気は落ちていくこととなる。シーン全体としては依然としてヴィジュアル系を支持する人達は少なくはなかったが表舞台から去っていくこととなったため、ニッチなものとして見られるようになった。かつてのブーム期ではやりのロックバンドのライブを楽しむ、というつもりでヴィジュアル系のライブに足を運んでいた層も離れていき、純粋にヴィジュアル系の世界が好きな人が集まる場となっていったのである。このタイミングで閉鎖的な状態になっていったと考えられる。

そもそも、外見重視のバンドという点で批判の対象になったこともあるし、また熱狂的なファンが多いということも知られていたためによほど流行にならなければ近づくことも少ないジャンルであったことは確かなのである。

そしてまた、一旦ブームが下火になった時、バンド側やバンドを売る側もセールスの方向を一般的な大衆向けではなく、ヴィジュアル系が好きな層に向けて強く発信していくことになった。このため、ヴィジュアル系の文化を外に発信することが少なくなり、情報も受け手側が積極的に得ようとしなければ手に入らない状況になってしまった。興味を持つ新規の聴衆を獲得することは難しく、そのため知らず知らずのうちにヴィジュアル系の世界へのハードルを挙げてしまったのである。知らないバンドに対し金銭を使うことは難しく、また外に向けて宣伝することも少ない状況に閉鎖的な感覚を覚えるのである。

また、ヴィジュアル系のファンに関しても閉鎖性を構築している一因となる場合がある。3章で述べたようにバンギャルたちはライブ参加やその服装には独特の雰囲気を持っている。ライブの中には振りがあり、ライブに行く格好もまたゴスロリ、パンク系など独特のものがある。ライブに参加する多くのバンギャルたちがある種統一されているような状態で固まっているため、これらを知らなければ一部の熱狂的なファンからは部外者の扱いを受け入り込むすきが少なくなっているのである。

さらには多くのジャンルがあるとはいえ、ダークな世界観があることには変わりはないし、ハードロックやメタルの雰囲気を持っているバンドも多くいるため、これらの音楽的

な趣向を持たない人にとっては興味の対象にはならないということも入り込みづらさを感じる一因となっていると考えられる。

4-1-2 シーンの外側から見た閉鎖性

それでは少し視点を変え、シーンの外側から見た部分を述べていきたいと思う。まず、前項で述べたとおり、はやりの音楽ではなくなったことが原因となって近づく人が減っている。それ以上にヴィジュアル系に近づかない要因としては、一番がやはりその”ヴィジュアル”の部分が大きい。ヴィジュアル系は男が化粧する、中性的な雰囲気を持つ、そうでない場合はバンドの世界観に染まった雰囲気を外見に持つことで成り立っている部分がある。古来より男性の化粧はあったものの、中性的な部分に関して言えば気持ち悪いなどの感想を持つ者も多い。また先ほど述べたように音楽的な趣向や世界観に共感する部分が無かったこともその原因だと考えられる。また、ラウドなロックバンド、メタル寄りのサウンドを出すロックバンドはヴィジュアル系に限った話ではなく日本の音楽シーンに数多く登場している。ストレートなメッセージ性や単純に楽曲としてのかっこよさが支持される原因だろう。彼らには彼らなりの打ち出す世界が存在しているが、ヴィジュアル系の場合楽曲に込められたものより、バンドの作り上げる世界観の方が強く前面に出てくる。これによってラウドなロックバンドが好きでもヴィジュアル系が苦手な人にとってみれば不純物が強く入り混じっていると感ずることもある。またボーカルの声が苦手という人もいる。おおむねボーカルは鼻にかけたような声で歌唱するため、それが苦手だと言う人もいる。こうしたことが重なり、ヴィジュアル系に近づきたいと思わなくなってしまう人が多い。近づくことが少なければ、前項でも述べたように情報も手に入らないため、よくわからない、別世界の事のように感じてしまうため、閉ざされた空間と感じてしまうのである。

4-1-3 私たちの勘違い

ヴィジュアル系に関しては様々な調査がなされてきている。大学生レベルでやっていることも多い。調査する側や、ヴィジュアル系を外から見る側は大きな勘違いを持っていると考える。3章で述べたようにヴィジュアル系にはダークな世界観があり、それに染まるバンギャルも多い。それらがネガティブな言葉を並べるようになったり、自傷行為に関係している、ということを考える人も少なくない。しかし、そこで述べたようなことはいわゆるステレオタイプな存在でしかない。バンギャルに対するアンケート調査ではネガティブな結果が返ってくることを期待して、そのような質問をとる人もいるようである。しかしバンギャルたちの多くはそのような感情を持ち合わせてバンギャルをやっているわけではなく、純粋に趣味として楽しんでいる者の方が圧倒的に多いのである。ダークな世界観、また、かつて X JAPAN の hide 氏が亡くなった時に問題視された熱狂的なファンが後追い自殺をするという報道もこのような偏見を助長する一因になっているのではないだろうか。蟹めんま氏はバンギャルたちも自分たちがネガティブな感情を強く持ち合わせていると

思われていると考える人も多く、そういったアンケートには期待通りの答えを返していたと著作の中で振りかえっている。また、SNS に書いてあるネガティブな言葉の多くは言いかえれば、アニメオタクがよく使う「〇〇(キャラクター名)は俺の嫁!」やロリータファッションなどもアニメのコスプレと同様に自分はこのような世界が好きで特に〇〇が好きというアイコンを示しているにすぎない場合が多い。

これらの真意を読み解くと彼女たちは決してもともとネガティブな感情があり、共感できる音楽に触れたのではない、単純に音楽として、美青年に対するあこがれの存在として好きになった場合が多いのである。

ヴィジュアル系に対しステレオタイプなイメージを持っている人達にとっては彼女たちの真意や実態を見ることができず、見えてこないからこそ入るのには敷居の高い異質な世界に映ってしまうのではないだろうか。音楽を介した文化であるため好き嫌いはあるが、閉鎖的に見えてしまっているのは少なくとも真意に触れない人がいることも大きく関連していると考えられる。

4-2 まとめ

ヴィジュアル系はどうしてもその奇抜さやファンの熱狂的な度合いから内輪で盛り上がっている感覚を受けてしまう。特にそれは活動の規模が小さくなればなるほど顕著に表れる。また、若手のヴィジュアル系バンドにはもともとヴィジュアル系が好きだった人がほとんどであるためバンギャルたちの特徴をとらえているバンドも少なくない。その結果ライブ中のMCや楽曲もバンギャルたちにしか伝わらないものになっている傾向もある。演者、聴衆、その他に属する三者それぞれがヴィジュアル系に閉鎖的な雰囲気を作り上げているのである。

第5章 まとめ

この論文を通してヴィジュアル系に関する文化を改めて見る事が出来た。一時は流行の頂点にいたヴィジュアル系も現在では一部の人が好むニッチなジャンルに落ち着いている。しかしそのニッチさが様式美を発展させることになったのは言うまでも無い。バンドにせよバンギャルにせよ双方に強いこだわりがある世界なのである。強いこだわりこそが下火になっても消えずに続いていく要因であると考えられる。

ヴィジュアル系は外見先行で音楽のジャンルとは言い難い部分を持っているのも確かなことだが、音楽が大前提にあり、音楽で成り立っていることも確かである。近年、男性ファッションの世界に「Vホス系」という言葉が生まれた。この言葉が差していることは、ヴィジュアル系とホスト系の服装には共通する部分が多く、これらを組み合わせることでファッションのジャンルとして成り立たせようとしていることである。どちらが上位という気は毛頭ないが、ヴィジュアル系がヴィジュアル系たる理由はやはり音楽の存在があつてこそなのだと考える。バンドがあり、バンギャルがいて音楽でつながることによって今のヴィジュアル系シーンは成り立っているのである。

しかし、この状況はシーンに対して必ずしもいい状況ではなく、新しく聞く層を取り込みづらくしているのもまた事実なのである。さらに”内輪”感がどうしても強くなじめない人にとってみればなじみづらい。こうした状況に、ヴィジュアル系にハマらない人はよくわからない、気持ち悪い世界に映ってしまうこともある。内側からも、外側からもお互いに閉ざしている状況が閉鎖性の一番の原因になっていると考えられる。

最近ではメジャーに行くバンドやメディアに多く登場するバンドも増えてきているため、少しずつ今のヴィジュアル系に目が向けられていることも事実である。また、アニメなどのタイアップによりオタク層の多いアニメソングやアイドルソングと同様にグッズとして買う層がいるためにセールスでは上位に入ることも珍しくはなくなってきた。日本の音楽の文化の中でよりコアなものにも目を向けられている状況に近づいてきていると考える。ニッチな世界だからこそその強みでもあり、これらのサブカルチャーと関連して様々な場所で見られる機会も増えた。色んな人に知ってもらうきっかけにはなっているのではないだろうか。ヴィジュアル系シーンがヴィジュアル系だけで表舞台に戻ることは難しいかもしれないが、日本独自の文化として他のサブカルチャーとの連動により興味を持つ人が増えれば入り込もうとする感覚が生まれ、閉鎖性は少しずつ薄れていくと考える。

そしてまた、若手のヴィジュアル系バンドは人気落ち着いたころにバンギャ男であった人も多いためにバンギャルたちの内情に詳しいバンドマンも多いがそれを踏まえてよりバンギャルに向けたライブを作り上げる方向にあり、バンギャルと特に強い連帯感を求めるようになっている。確かにバンギャルが一番のお得意様であるためにそうなるのは仕方のないことだが、元ヴィジュアル系バンドマンである金子友也氏は「それでは市場が広がらず、バンド同士が互いの利潤を搾取する構造になってしまっている。」と指摘している。

先述したとおりバンドとバンギャルが音楽を介して繋がっているからこそヴィジュアル系は消えずに残っているため、バンドが疲弊すればおのずと消えていく文化ということも言える。この疲弊する状況を変えていくことが必要となってくる。とするならば、アンダラ化した時に強くつながりすぎてしまったバンド、バンギャルの関係を少しでも緩めていくことにも活路があるようにも思われる。

●おわりに

自分が好きなジャンルの話をまとめるのは苦勞するとともに好きなことであるがゆえになじみやすく、とても書きやすかった。趣味の延長線上にあるため、これまで自分の認識の中にあったもの、新しい発見のあったもの、認識とはずれていた部分などとても興味深いものが見られたと思う。この論文自体、2013年に22歳を迎えた人間が書いているため、その上下の年齢層の方が見るとどうしても違和感を覚えてしまうときが来るのでは…とも考えている。常に変わり続ける部分があるためにいたし方のないことだとも思う。好きなジャンルを享受し続けられることを祈りつつ…

最後に関わってくれた皆さまに感謝の意を表します。忙しい中取材に付き合っていたいただいたバンドマンの方々、様々強いこだわりを持った方々本当にありがとうございました。

そして、困難なジャンルながらも無理やりにでもGOサインを出していただいた角一典先生、本当にありがとうございました。

●参考文献

- ・大島暁美,2013,『ヴィジュアル・ロック パーフェクト・ディスク・ガイド 500』シンコーミュージック
- ・蟹めんま,2012,『バンギャルちゃんの日常 1・2』エンターブレイン
- ・佐藤郁哉,1984,『暴走族のエスノグラフィー』新曜社
- ・山田由香里,2012,『現代の若者における人間関係 —サブカルチャーによる考察—』
- ・小形道正,2013,『社会学評論』:「ファッションを語る方法と課題—消費・身体・メディアを越えて—」
- ・松井広志,2013,『社会学評論』:「ポピュラーカルチャーにおけるモノ—記号・物質・記憶—」
- ・藤田結子,2013,『社会学評論』:「欧米都市における文化生産と「日本らしさ」の構築 —ファッション、デザイン、アートの制作者のエスノグラフィー—」
- ・宮台真司・石原英樹・大塚明子,1993,『サブカルチャー神話解体』PARCO 出版
- ・R・K・マートン,森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳,1961,『社会学理論と社会構造』みすず書房

●参照 HP

- ・蟹めんまのバンギャル漫画
<http://ameblo.jp/menmanomanga/>
- ・VKdb.jp
<http://www.vkdb.jp/>
- ・BLOGOS
<http://blogos.com/article/41711/>

ヴィジュアル系バンドの文化
—ヴィジュアル系の現在と閉鎖性—

聞き取り調査資料

話し手：ヴィジュアル系バンドマン A さん

聞き手：伊藤 良因

日 時：2012 年 10 月 29 日 22 時 40 分~23 時 00 分

場 所：仙台市内某レストラン内

伊藤：それではよろしくお願いします。

A：お願いします。

伊藤：まず年齢をお教えてください。

A：今 25 歳です。

伊藤：それではヴィジュアル系を始めたきっかけを教えてください。

A：もともとダンスやヒップホップ、R&B のようなクラブミュージックが好きだったんですが、違うジャンルに手を伸ばそうと思ったときにちょうど X を聞く機会があって。気付いたらそのままヴィジュアル系にハマってましたね。で、高校の時バンドやろうってなってヴィジュアル系を選んでいました。

伊藤：なるほど…で、パートは何を選んだんですか？

A：ドラムですね…ギターは弦が多くて難しいなあって思って、で、ボーカルは案外やりたがる人が多いんですよ。なのでやめて…そこでドラムが少なかったんですね。周りに。なのでドラムをやったら次第にバンドに誘われるようになっていって、ドラムを専門的にやっていますね。ちなみに今のバンドとは別にボーカルグループで活動もしているのでやったことないことに挑戦する、という意味でボーカルもやっています。

伊藤：楽器やらないってだけでボーカル選びたがるのはわかります。細かくはいつごろから始めたんでしょうか。

A：ドラムは高校終わりの 18 歳の時に始めましたね。半年で初ライブっていうなかなか大変なスケジュールでしたけど。(笑)当時とはとにかく邦楽なら X、洋楽ならハードロック、ヘヴィメタル系の楽曲を叩いてましたね…

伊藤：半年ってすごいですね…高校出てからはどのように活動していったのでしょうか。

A：興味ある分野があったので、一旦専門学校に通ってました。でもバンド活動が少し大変になってきて結局やめちゃいましたけど。

伊藤：周りにそういう人って多いんですか？

A：今は…そうですね。高校出てる子がほとんどかな。といっても学歴とかは関係ない世界なんで。

伊藤：そうですね…それでは現在バンドはどのように活動してってるんですか？

A：メジャーとかインディーズでも力のある事務所じゃないんで自分たちで何とかやっていますね。バンドを売るにはフライヤーとか CD、衣装は絶対必要ですね。でも意外とある程度のクオリティのものはできちゃう。だけど衣装に関してはバンドのコンセプトに沿ったものにしていくと 1 着 20 万円くらいかかることもありますね。これでは完全に赤字なのでグ

グッズなんかで埋めたりしています。

伊藤：インディーズでも衣装代、馬鹿にならないですね…ちなみに仕事は何をされているんですか？

A：深夜の清掃業ですね。周りもだいたい外見自由で人前に出ないようなものを選んでやってる子多いみたいです。

伊藤：ちなみに今、どのくらいの年齢のバンドマンが多いんですか？

A：22~25歳くらいだと思います。10代の子はなかなかやりませんね。あと25歳超えると一気にやめていきますね。

伊藤：やっぱり何か見えちゃうんですかね…

A：みたいです。俺の場合はたまたまそれなりにできてたからよかったけど。とはいっても来年はわかりませんね。

伊藤：厳しい世界ですね…話を戻します。グッズはどのように作っているんですか？

A：デザインが得意な人にサポートという形で作ってもらってます。あとヘアメイクさんなんかサポートできてもらっていますね。人と人のつながりで見つけるっていうやり方になっています。

伊藤：CDのジャケットとかもですか？

A：そうですね。録音自体はライブハウスとかスタジオにお金出して作ってもらって、市内のCDショップに置かせてもらったり…ジャケットはサポートしてくれる人に任せてます。ライブハウスでほぼ売れていきますね。

伊藤：ということはライブに来てくれるファンも結構いるんですか？

A：少なくはないですね…小さめの箱でやることもあるのでまちまちですけど。

伊藤：ファンとの距離感ってどんな風に考えていますか？

A：適度な距離感は保っていると思います。だけど結局はバンドマンの意識次第っていうところだと思います。ただいつも来てくれる子も多いからライブ中はいい雰囲気だと思います。女性がらみでよくない話はたくさん聞いてきましたし…詳しくはちょっと話したくないですが。(笑)

伊藤：わかりました。(笑)ではこの程度にとどめておきます。それではバンド同士の関係は今どのようなになっているのでしょうか。

A：俺らより上の世代は上下厳しい人たちが多いかもしれないですね。今はそうでない感じですね。仲良くしすぎるのもななあになんていいとは思えませんが…これも人柄や意識の問題かもしれませんね。主催ライブに誘ってくれたりもするので。その中でもいろいろとお金に関しては強かな面もありますけどね。

伊藤：というと…？

A：あまり仲良くないバンドのノルマが違ったりします。そんなことやってるバンドさんはだんだん消えていく感じはありますけど。

伊藤：なるほど。(笑)そんなこともあるんですね。最後に個人的に気になる点をお聞きしま

す。

A：はい。

伊藤：ヴィジュアル系ってものすごく閉鎖的な印象受けるんですよね。僕も何回かライブ見に行ったりするんですがファンの中にも統一感があるというか…

A：それはターゲットを絞った結果だと思います。ヴィジュアル系が好きな人に向けてしか発信しませんからね。情報とか。あとは印象はよくないですね。とくに初めてヴィジュアル系を見た人には。男がメイクするのに抵抗があったり…ヴィジュアル系ってだけで損してることもありますからね…あと、こういう状態のが好きな人って、バンドマンにも言えるかもしれませんがどこか劣等感持ってる人もいるともいますよ。精神的にやばかったり。この辺をうまくやっていくとどこまでもいってしまうところはあると思います。

伊藤：やっぱりそういう感情で結ばれていることもあるんですよね。ありがとうございました。

A；参考になるかわからないけどどうまくいくといいね。

話し手：ヴィジュアル系バンドマン B さん

聞き手：伊藤 良因

日 時：2012 年 10 月 30 日 23 時 40 分~00 時 20 分

場 所：盛岡市内某レストラン内

伊藤：よろしくお願ひします。

B：よろしく。

伊藤：先日 A さんに会ってお話を伺いました。

B：あ〜。A くんね。彼も色んな視点持つてるし参考になった？

伊藤：はい。ところで B さんはいま何故盛岡に？

B：前やってたユニットが解散しちゃってね。一旦故郷で今後の計画を考えてるところ。

伊藤：なるほど。それでは質問に入ります。仙台で活動している時はどのような形で活動してたのでしょうか。

B：最近のは…ボーカルユニットかな。バンドだけじゃないものやってみたくてね。あと多分 A くんから聞いたと思うけど仙台ではヴィジュアル系バンドのレーベル立ち上げてたこともあったよ。

伊藤：はい。A さんから聞きました。それでは B さんから見た仙台のヴィジュアル系ってどんな人が多いんですか？

B：これも A くんと同じことかもしれないけど 20 代以上が圧倒的に多いね。でアルバイトやってる子が多いかな。10 代はほんとに少なくて困ってるなあ。

伊藤：どうしてそうなったんですかね。

B：男の子の行動って女の子よりもはやり敏感だと思うよ。だからいま正直ヴィジュアル系ははやってないし、はやってない分憧れをもつ 10 代の子が少ないってのもあるかな。ヴィジュアル系はファッションだと思うよ。はやり物っていう感覚かな。あと仙台とはいえ人がいないのかも(笑)

伊藤：そんなことは…ないと思いますけど…(笑)他の場所に移す人もいるのでしょうか。

B：そうだね。東京に行くバンドは少ないけどいるかな。東京のバンドとか事務所とかと知り合いになってっていう感じで。ファンの子も熱狂的な子たちはついていく子もいるよ。彼女たちはそれがアイデンティティになってるんだと思う。

伊藤：先ほどから事務所という言葉も出てきてはいると思うんですが、事務所としてはどのような戦略でバンドを売ってるんですか？

B：イベントを少なめにやったりとか。

伊藤：意外ですね。多くするのかと思いました。

B：もしヴィジュアル系が好きな女の子が 100 人いるとしたら、月一でイベントをやった方が 90 人以上はくるよね。主催者側には負担も減らせるし、イベントを行えばバンド同士のつながりも生まれるし、何よりお客さん 10 人呼べないような無名な子たちのバンドも 90

人のお客さんに聞いてもらえるしね。

伊藤：なるほど…そうやって知名度を上げていく方法もあるんですね。

B：それでも赤字の時もあるけどね。

伊藤：そうなんですか？

B：特にツアーはね。全部来てくれる子もいるけどその土地その土地に好きな人が何人いるかはわからないことが多い。仙台だとある程度は予測付くんだけど。でもグッズは利益率がいいね。言ってしまうとゴールデンボンバーもそうだね。チケット代で箱代、人件費がちよんちよんって感じかな。あとはグッズの売れ行きが彼らの収益になっていく。Acid Black Cherry もそんな感じじゃないかな。

伊藤：あのクラスでもそういう感じなんですね…事務所の雰囲気も何か変わってたりするんですか？

B：人気商売だからね。1年契約で成果がないと切ったりするところも多いみたい。ただ1年で成果が出ないっていうのは20年生きてきての1年じゃなくて、楽器を本気でやってきての1年だからね。5、6年の中の1年。それで切られるんだからバンドのモチベーションは上がらないよね。回転も速いから繋がり自体も表面上になってきてるし。

伊藤：そうなんですね…表面上というところをもう少し聞かせてください。

B：回転が早いっていう理由はあるんだけどもうひとつ。これは世代の問題なんじゃないかな。昔はそれこそヤンキーが多かった。そうだね…俺が始めた15年くらい前かな？

伊藤：ヤンキーですか…

B：その時は目立ちたい人が多くてねえ。バイク乗って暴走するかギター持ってド派手にやるかのどっちかだったよ。その時は体育会系みたいな人達ばかりで。上下関係もきつかった。酒飲まされてつぶされることなんかザラだったね。(笑)ただ、下の世代に目をかけてくれてたってのもあるかな。集客力のある先輩のライブに出させてもらったりライブのアドバイスもらったりね。同世代のライバルには殴り合いのケンカしてるのを見たけど。(笑)

伊藤：すごい時代だったんですね…

B：そう。今の子どもたちはそうだね…パソコンとかDTMとかできちゃうオタク系の子どもが多いかな。俺たちの世代が上からされた理不尽なこととかを嫌ったんだよね。結果的に下の子どもたちは繋がりは薄くなったのかな。俺らが厳しくしても今の子どもたちは上下関係をあまり気にしない部分が多いからきっとこんな風になってたと思うけどね。

伊藤：学校とかでもたしかにそういう雰囲気ありますね。

B：でしょ？だから先輩が上っていう感覚よりも今は集客力のあるバンドがもてはやされる感じかな。

—中略—

伊藤：ところで、ファンとバンドの距離感について聞きたいんですが…昔と今とでは変わ

ったことってありますか？

B：そうだね…昔はほら、ツイッターとか無かったでしょ？連絡とる手段があまりないんだよね。そういう彼らが月に数回ステージに立つって言う風な活動をしてたんだ。そうなるってステージでしか見れないからってだんだんファンの子たちは神のように崇めるんだよね。(笑)そうすると心の中ではバンド自体の価値も上がっていったのさ。だけど今はメールもあるしツイッターとかもあるでしょ？バンドがファンに誘うメールを送ったりするんだよね。それってさ、ホストの営業メールみたいなもんじゃん。

伊藤：ホスト…たしかにそこだけ見ると近いものがありますね。

B：しかもホストはまだ仕事だからってのはあるけどバンドは仲良くなったりする子もいるからね。これじゃ身近に感じちゃう。バンドとしての価値は下がっちゃうよね。身近にいるんだもん。ファンは現実逃避にきてるのにバンドは身近で現実の一部になっちゃってるんだもん。

伊藤：見る側からしたら友達のライブ見にきてる感覚になっちゃいますね。予定合わないから行かないっていう風にもなりますよね。

B：そうそう。予定合わせてでも行くっていう価値が生まれなくなるよね。

伊藤：それでは最後に閉鎖性に関して聞きたいと思うんです。他のジャンルのファンが入り込むすきがないような気がするんですが…

B：そうだね。それは餅は餅屋ってことかな。好きな人だけ聞けばいいみたいな感じになってる。あとそうだね。今はアニメソングをやるバンドになってるかな。特に音楽に固執されてない感じはある。何が受けるかわからない分、自由度はあるんだけどね。ただ、ヴィジュアル系っていう制約も閉鎖的になってる理由ではあると思うよ。

伊藤：なるほど。ありがとうございました。

B：ご苦労様でした。